



Title	＜翻訳＞アルムファッダリーヤート試訳（II-VIII）
Author(s)	池田， 修
Citation	アラブ・イスラム研究. 2010, 8, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105926
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アルムファッダリーヤート試訳

— (II - III) アルカルハバ・アルウラニー —

池田 修*

まえがき

الْكَلْحَبَةُ الْعُرْنِيَّ (الْيَزْبُوعِيَّ)

هَبِيرَةُ بْنُ عَبْدِ مَنَافٍ بْنِ عَرِينِ بْنِ ثَعْلَبَةَ بْنِ يَزْبُوعِ بْنِ حَنْظَلَةَ بْنِ مَالِكِ بْنِ زَيْدِ مَنَاةَ بْنِ تَمِيمٍ

この詩人は、Mālik b. Ḥanzala 一族の土地 Zarūda と言うところに住んでいた。ある日、Ḥazīma b. Tāriq に率いられたタグリブ族が Mālik 一族の地に侵入してラクダを奪った。詩人は al-ʿArāda (イナゴ、バッタ) と言う名の愛馬に乗って敵将 Ḥazīma を追撃して、奪われたラクダを取り戻したが、敵将はとりくにがした。この詩はこの戦闘での愛馬を褒めた部分と、6 および 7 行の全く前後のつながりのない部分からなっている。おそらく、元の詩はもっと長いものであったと思われるが、大幅に脱落したものであろう。

al-Mufaḍḍaliyāt の 3 番目には、おなじ詩人の 5 行だけの断片詩が載せられている。この詩が詠まれた背景として次のような一件が伝えられている。

詩人はシリアのある王を訪ねようとして旅立ったが、カルヌ・ザブイ Qarn Zaby というところに来て、引き返し、次のように読んだ。

رَدَدْتُ طَعَائِنِي مِنْ قَرْنِ ظَبْيٍ وَهُنَّ عَلَى شَمَائِلِهِنَّ زُورٌ

私はカルヌ・ザブイからラクダの駕籠に乗った女たちを押し戻した。

その際、彼女らは左手に偶像を持っていた。

その後、詩人は Balīy b. ʿAlḥāf b. Quḍā'a 一族の近くにテントを張った。やがて Jusham b. Bakr と言うタブリブ系の一族が略奪を仕掛けてきた。詩人は Balīy の味方となって息子とともに反撃し、退去させたが、息子は負傷し、それがもとで死亡した。5 行は詩人の愛馬アルアラダ al-ʿArāda を描写している。

* 大阪外国語大学 名誉教授

(II) テキスト

- 1- فَإِنْ تَنَجَّ مِنْهَا يَا حَزِيمَ بْنَ طَارِقٍ فَقَدْ تَرَكْتَ مَا خَلْفَ ظَهْرِكَ بَلْقَعًا
 2- وَنَادَى مُنَادِي الْحَيِّ أَنْ قَدْ أُتِيتُمْ وَقَدْ شَرِبْتَ مَاءَ الْمَزَادَةِ أَجْمَعًا
 3- وَقُلْتُ لِكَأْسِ الْجَمِيهَا فَإِنَّمَا نَزَلْنَا الْكُثِيبَ مِنْ زُرُودٍ لِنَفْرَعَا
 4- كَأَنَّ بِلَيْتَيْهَا وَبَلَدَةَ نَحْرِهَا مِنَ النَّبْلِ كُرَّاثَ الصَّرِيمِ الْمُنْرَعَا
 5- فَأَذْرَكَ إِبْقَاءَ الْعَرَادَةِ ظَلْعُهَا وَجَعَلْتَنِي مِنْ حَزِيمَةٍ إِصْبَعَا
 6- أَمَرْتُكُمْ أَمْرِي بِمُنْعَرَجِ اللَّوَى وَلَا أَمَرَ لِلْمَعْصِيِ إِلَّا مُضِيعَا
 7- إِذَا الْمَرْءُ لَمْ يَغْشَ الْكَرْبِيهَةَ أَوْشَكَتْ جِبَالُ الْهُوَيْنَا بِالْفَتَى أَنْ تَقْطَعَا

(II) 訳

- 1- ハジーマ・ブヌ・ターリクよ、わが愛馬から逃れたとはいえ、愛馬に分捕り品すべてを捨てさせられ何も取らずに裸同然になってお前は逃げたのだ¹⁾。
- 2- 部族の触れ人が「敵襲」だ、と叫んだとき、馬は皮袋の水をすべて飲んでいて²⁾。
- 3- 私は娘のカアスに「馬にはみをつけよ」と言いつけた。私がザルーダの砂丘に住んだのはひとえに救援に応えるためだ³⁾。
- 4- 愛馬の首筋や喉のあたりに突き刺さった矢は、まるで、砂山から抜き取られたニラネギ⁴⁾のようであった。
- 5- やがて愛馬アルアラダはびっこをひき、走る余力を失い、私は指呼の間まで追い詰めたハジーマを逃がしてしまった⁵⁾。
- 6- 私は砂丘の麓の曲がり角で君たちに命令したが、服従されない者の命令は聞き入れられないものだ。
- 7- 男子たる者が（戦闘のような）難事に立ち向かわなければ、彼をつなぎとめる平穩の絆は断ち切れよう⁶⁾。

- 1) アラブは自分の行為を馬の行為として描く傾向がうかがえる。
- 2) 馬が水を飲みすぎると脚力が衰えることを指している。ここの場合、詩人の馬が水を飲みすぎたために、敵将を逃がしたと言いつけていると受け止めたが、他方、敵将が馬に水を飲ませすぎて襲撃に失敗したとも取れる余地がある。
- 3) 下の句の主語が一人称単数の伝承もあり、訳はこれに従った。アラブは馬の世話は、信頼できる自分の子供たちか妻女にしか委ねなかった。アルムアッラカートのアムル・ブヌ・クルスウム 87 行にも「彼女は馬に飼料を与えながら」とある。
- 4) ニラネギは砂地にしか生えず、三つ葉で、引き抜かれたものは矢の形に似ている。戦闘中に馬の胸や首に多数の矢が刺さっているさまを述べたもの。
- 5) これを 2 行目と関連付けて解すると、詩人の馬が戦闘に入る前に水を飲みすぎて途中で息切れして敵将を逃がしてしまった、と言いつけているととれる。
- 6) 6 行と 7 行は、それぞれ、別件に触れている。おそらく、原詩はもっと長いもので、脱落が生じたものが伝えられていると考えられる。この 2 行は、詩人と彼の部族ヤルブーウとの口論に

(III) テキスト

- ١- تُسَائِلُنِي بَنُو جُشَمَ بْنِ بَكْرِ
أَعْرَاءُ الْعَرَادَةِ أَمْ بِهِمْ
- ٢- هِيَ الْفَرَسُ الَّتِي كَرَّتْ عَلَيْهِمْ
عَلَيْهَا الشَّيْخُ كَالْأَسَدِ الْكَلِيمِ
- ٣- إِذَا تَمْضِيهِمْ عَادَتْ عَلَيْهِمْ
وَقَيَّدَهَا الرِّمَاحُ فَمَا تَرِي
- ٤- تَعَادَى مِنْ قَوَائِمِهَا ثَلَاثَ
بِتَحْجِيلٍ وَقَائِمَةٍ بِهِمْ
- ٥- كَمِيتٌ غَيْرُ مُحْلِفَةٍ وَلَكِنْ
كَلَوْنَ الصَّرْفِ عُلَّ بِهِ الْأَدِيمُ

(III) 訳

- 1- ジュシャム・ブヌ・バクル族は私に貴様の愛馬アルアラダの全額に白い星があるか、それとも、一色かと尋ねている。
- 2- これこそ彼らに向かって突進した駿馬である。それにまたがるのはライオンのような傷ついた老騎士（即ちこの私だ）。
- 3- アルアラダは彼らの戦列に突入して攻め、馬首を返して再び攻めるが、やがて矢が多く刺さり、動きをとめる。
- 4- この雌馬の3本の足首には白い毛環があり、一本の足首だけがこれを欠き一色の毛で覆われている。
- 5- これはまごうことなく栗毛の馬で、皮をシルフ⁷⁾で二度染めしたような色合いである。

かかわるものと推測される。

7) シルフ şirf は皮を赤色に染める染料

— (IV) アルジュマイフ —

まえがき

الْجُمَيْحُ
مُنْقِذُ بْنُ الطَّمَّاحِ بْنِ قَيْسٍ

アサド族出のジャーヒリーアの詩人および戦士で略奪騎士として知られている。イスラーム前約 40 年の Yawm al-Jabala の戦いで戦死した。彼の父 al-Ṭammāḥ は詩人イムルウ・ル・カイスの友人でビザンツ皇帝に会うために彼に同行したが、皇帝にイムルウ・ル・カイスを中傷し、死に至らしめたとの伝説がある。

アルジュマイフはこの詩で妻との関係を取りあげている。彼女の出身部族のある男が、彼女にうだつのあがらぬ詩人との離婚をそそのかす。ために、夫婦の関係があやしくなる。しかし、この試みは、人生経験豊かな老詩人には無益であった (3-4 行)。妻が詩人にむかう態度は藪に潜む子持ちの雌ライオンのものであるが、他方、彼女は些細な事に、童のようにおびえてしまう側面を持っていた (5-6 行)。妻と詩人の仲が悪くなったのは、詩人が種々のやむを得ない事情でラクダを手放し、その数が減ったためであった (8-10 行)。しかし、詩人は、妻が慎み深く耐えてくれれば、関係修復の余地があると、詠んでいる (11-12 行)。

(IV) テキスト

- | | |
|---|---|
| مَجْنُونَةٌ أَمْ أَحَسَّتْ أَهْلَ حَرْوِبٍ | ١- أُمَسْتُ أُمَامَةً صَمْتًا مَا تُكَلِّمُنَا |
| ضُرِّي الْجُمَيْحَ وَمَسِّيهِ بِتَغْذِيبٍ | ٢- مَرَّتْ بِرَاكِبٍ مَلْهُوزٍ فَقَالَ لَهَا |
| إِنَّ الرِّيَاضَةَ لَا تُنْصِبُكَ لِلشَّيْبِ | ٣- وَلَوْ أَصَابَتْ لَقَالَتْ وَهِيَ صَادِقَةٌ |
| لَنْ يُعْطِيَ الْآنَ عَنْ ضَرْبٍ وَتَأْدِيبٍ | ٤- يَا بَنَى الذِّكَاءِ وَيَا بَنَى أَنْ شَيْخُكُمْ |
| جَرْدَاءُ تَمْنَعُ غِيلاً غَيْرَ مَقْرُوبٍ | ٥- أَمَّا إِذَا حَرَدَتْ حَرْدِي فَمُجْرِيَةٌ |
| تَظَلُّ تَزْبُرُهُ مِنْ خَشْيَةِ الذِّيبِ | ٦- وَإِنْ يَكُنْ حَادِثٌ يُخْشَى فَذُو عِلْقٍ |
| فَإِنَّ أَهْلِي الْأُولَى حَلُّوا بِمَلْحُوبٍ | ٧- فَإِنْ يَكُنْ أَهْلُهَا حَلُّوا عَلَى قِصَّةٍ |
| وَكُلُّ عَامٍ عَلَيْهَا عَامٌ تَجْنِيبٍ | ٨- لَمَّا رَأَتْ إِبْلِي قَلَّتْ حُلُوبُهَا |
| وَالْحَقُّ صِرْمَةٌ رَاعٍ غَيْرِ مَغْلُوبٍ | ٩- أَبْقَى الْحَوَادِثُ مِنْهَا وَهِيَ تَتْبَعُهَا |

- ١٠- كَأَنَّ رَاعِيَنَا يَحْدُو بِهَا حُمْرًا بَيْنَ الْأَبَارِقِ مِنْ مَكْرَانَ فَالْلُّوبِ
 ١١- فَإِنْ تَقَرَّرِي بِنَا عَيْنًا وَتَحْتَفِضِي فِينَا وَتَنْتَظِرِي كَرِّي وَتَغْرِيبِي
 ١٢- فَأَقْنِي لَعَلَّكَ أَنْ تَحْظِي وَتَحْتَلِبِي فِي سَحْبَلٍ مِنْ مُسُوكِ الضَّانِ مَنْجُوبِ

(IV) 訳

- 1- 妻のウマーマ⁸⁾は押し黙ってわれらにものを言わなくなった。いったい気でも狂ったのか、それとも(彼女の実家の)ハッルブー族がわれらの仲たがいの意趣を彼女に含めたのか。
- 2- 彼女がしたあごに焼印のあるラクダ⁹⁾に乗った男のそばを通ると、彼は“アルジュマイフを苦しめ、いじめてやれ”と告げた。
- 3- もし妻が的をはずさなければ、正直であるがゆえに、きっと“ゴマ塩の老人をしごいても無駄骨よ”と言ったであろう¹⁰⁾。
- 4- 年を重ねた私の年齢がそのようなことは断じて許さないであろう。叩かれてもしごかれても決してしたがわないであろう。
- 5- 彼女が私に立ち向かうときは子持ちで毛の短い雌ライオンが子を隠している茂みを守るかのように近寄りがたい。
- 6- けれども、なにか恐ろしいことが起こると、袖なし服を着た童のようになり、オオカミを恐れて、小言を並べて追っ払おうとする程度のもの¹¹⁾。
- 7- 彼女の実家がキダ¹²⁾に住んでいるのであれば、私の実家はマルフーブに住んでいるものたちだ。
- 8- (このような事件があったのは)ちょうど彼女が私のラクダの乳の出が悪いのに気づいたときのことである。彼女の上を歳月が過ぎ去るが、ミルクが出ない年もある¹³⁾。
- 9- 年々歳々、さまざまな出来事¹⁴⁾が相次いで起こり、当然なすべき支出も重なり、何事にもくじけない牧夫が所有するラクダも30頭まで減ってしまった。
- 10- まるでわれらの牧夫はマクラーンと溶岩の多い石ころ混じりの土地でロバの群れ

8) 'Umāma ('Umaymaともいう)は詩人の妻。

9) ラクダの焼印でどの部族の者が分かる。

10) 老人は経験が豊富で、簡単にその考えを変えないことを言ったもの。

11) オオカミから逃れるすべさえ知らぬ、力も知識もない女だといっている。

12) キダ Qida はバクルとタグリブが争った土地。バスースの戦いの後、タグリブは北に移住し、タミーム系の部族がここに住むようになった。なお、この行は前後と関係がないもので、脱落があったことをうかがわせる。

13) この行は lammā の帰結節が一見したところ欠けているようだが、1行目の帰結節と見なすこともできる。

14) al-ḥawādithを“さまざまな出来事”としたのは、注釈者がその内容を、災害、客へのもてなし、血債などと説明しているため。部族のためにラクダを手放すことなどもあってラクダが減り、妻との関係が怪しくなったが、希望は失っていないさまを詠んでいる。

¹⁵⁾を迫っているかのようだ。

- 11- だが、妻よ、もしそなたがわれらに好意を寄せ、控えめな態度を保ち、私の略奪振
りや遠隔地への襲撃振りに注目してくれるなら、(それでよし)。
- 12- よって、慎み深く耐え忍ぶが良い。さすれば、そなたは幸運を掴み、アカシアの樹
皮でなめされた羊の皮袋に乳を搾ることだろう。

15) ラクダの数が減り、その群れのコントロールがよく出来ているさまを、まともりの良いロバの群れに譬えたもの。

— (V) サラマ・ブヌ・アルフルシュブ・アルアンマーリー —

まえがき

سَلَمَةُ بْنُ عَمْرِو بْنِ نَصْرِ بْنِ حَارِثَةَ بْنِ طَرِيفِ بْنِ أَنْمَارِ بْنِ بَغِيضِ بْنِ رَيْثِ بْنِ عَطْفَانَ
ابْنِ سَعْدِ بْنِ قَيْسِ بْنِ عَيْلَانَ بْنِ مُضَرَ

al-Anmār 族は Ghatafān 系の部族で Asad 族と Tayy 族の山地の南、al-Rumma 溪谷の上流域に住んでいた。これは小さな部族であったため、より有力な Abs および Dhubyān 族系の下位部族と連合を組んでいた。この詩は6世紀に起こった Āmir b. Ṣaṣ'a と Ghatafān 部族の間の戦い、Yawm al-Raqam を背景として詠まれたものとされている。al-Raqam は、メッカ近くの山地で Ghatafān 族の領域であった。そこへ Āmir 族が襲撃してきたが、Ghatafān が勝ち、敵将 Āmir b. al-Ṭufayl は al-Rihāla という駿馬のおかげで逃げることが出来た。ところが、彼の兄弟 al-Ḥakam b. al-Ṭufayl は退却のとき本隊とはぐれて砂漠に迷い込んでしまった。彼はやがて水辺を見つけて、近づいてみると多くの兵がいるのに気がついたが、それは実は味方の兵らであったが、敵兵と思い込み、殺害されて、四肢断切されるのをおそれて、樹にロープをかけ、首をつって死んだ、と伝えられている。

なお、詩人の父、Āmir のあだ名 Khurshub には、背が高く肥満した男、という意味がある。

(V) テキスト

- | | |
|---|---|
| ١- إِذَا مَا غَدَوْتُمْ عَامِدِينَ لِأَرْضِنَا | بَنِي عَامِرٍ فَاسْتَظْهَرُوا بِالْمَرَائِرِ |
| ٢- فَإِنَّ بَنِي دُبْيَانَ حَيْثُ عَهْدْتُمْ | بِجَزَعِ الْبَيْتِلِ بَيْنَ بَادٍ وَحَاضِرِ |
| ٣- يَسُدُّونَ أَبْوَابَ الْقِبَابِ بِضُمَرٍ | إِلَى عُنَنِ مُسْتَوْتِقَاتِ الْأَوَاصِرِ |
| ٤- وَأَمْسَوْا حِلَالًا مَا يُفَرِّقُ بَيْنَهُمْ | عَلَى كُلِّ مَاءٍ بَيْنَ فَيْدٍ وَسَاجِرِ |
| ٥- وَأَصْعَدَتِ الْحُطَابُ حَتَّى تَقَارُبُوا | عَلَى خُشْبِ الطَّرَفَاءِ فَوْقَ الْعَوَاقِرِ |
| ٦- وَنَجَوْتَ بِنَصْلِ السِّيفِ لَا غِمْدَ فَوْقَهُ | وَسَرَجٍ عَلَى ظَهْرِ الرَّحَالَةِ قَاتِرِ |
| ٧- فَأَتْنِ عَلَيْهَا بِالَّذِي هِيَ أَهْلُهُ | وَلَا تَكْفُرْنَهَا لَا فَلَاحَ لِكَافِرِ |
| ٨- فَلَوْ أَنَّهَا تَجْرِي عَلَى الْأَرْضِ أَذْرَكَتْ | وَلَكِنَّهَا تَهْفُو بِتِمْنَالِ طَائِرِ |
| ٩- خُدَارِيَّةٍ فَتَخَاءَ الْفَقْ رِيَشَهَا | سَحَابَةً يَوْمٍ ذِي أَهَاضِيبِ مَاطِرِ |

- ١٠- فِدَى لِأَبِي أَسْمَاءَ كُلُّ مُقْصِرٍ مِّنَ الْقَوْمِ مِنْ سَاعٍ يَوْتِرٍ وَوَاتِرٍ
 ١١- بَذَلْتَ الْمَخَاضَ الْبُزْلَ ثُمَّ عِشَارَهَا وَلَمْ تَنْهَ مِنْهَا عَنْ صَفُوفٍ مُّظَائِرٍ
 ١٢- مُقَرَّنُ أَفْرَاسٍ لَهُ بِرَوَاجِلٍ فَعَاوَلْنَهُمْ مُسْتَقْبِلَاتِ الْهَوَاجِرِ
 ١٣- فَأَذْرَكَهُمْ شَرْقَ الْمَرْوَرَةِ مَقْصِرًا بَقِيَّةُ نَسْلِ مِنْ بَنَاتِ الْقُرَاقِرِ
 ١٤- فَلَمْ تَنْجُ إِلَّا كُلُّ خَوْصَاءٍ تَدَّعِي بِذِي شُرَفَاتٍ كَالْفَنِيْقِ الْمُخَاطِرِ
 ١٥- وَإِنَّكَ يَا عَامِ بْنِ فَارِسٍ قُرْزُلٍ مُعِيدٌ عَلَى قَيْلِ الْخَنَاءِ وَالْهَوَاجِرِ
 ١٦- هَرَقَنَ بِسَاحُوقٍ جَفَانًا كَثِيرَةً وَأَذَيْنَ أُخْرَى مِنْ حَقِينٍ وَحَازِرِ

(V) 訳

- 1- アミールの子らよ、われらの土地をめざして朝出撃するときには、(首吊用の) ロープを持参するが良い¹⁶⁾。
- 2- ズブヤーン族の子らは、お前たちがよく承知しているように、アルバティール溪谷¹⁷⁾に控えている。一部の者は牧草地に、他の者は村で待ち構えている。
- 3- 皮製のテント¹⁸⁾の扉はすべて、よくきたえられて、引き締まった馬が封鎖している。馬はしっかりした綱で家畜小屋につながれている。
- 4- 彼らズブヤーンの子らは大集団であるが、異分子の混ざらない強固な一族で¹⁹⁾、ファイドとサージルの間の水場をすべて押さえている。
- 5- 薪集めたち²⁰⁾は遠隔地に出かけて砂丘の上に生えているタマリスクの樹のところに無事達する。
- 6- 貴様(アーミル)は鞘のない剣の刃と、貴様の馬アッリハーラの背にきちんとあった鞍のおかげで逃げる事が出来た。
- 7- よって、貴様を逃がしてくれた馬を、それ相応な言葉で褒めてやれ。決してその馬に恩知らずな態度をしてはならぬ。忘恩の徒は栄えることはない。
- 8- もしも貴様の馬が地面を駆けていたのであれば、私の馬に追いつかれていたのだが、いかにせん、貴様の馬は鳥(ワシ)²¹⁾のように飛んで逃げてしまった。

16) お前たちもアルハカムと同じように、首をつって死ぬことになろうと皮肉っている。

17) アルバティール al-Batīl はネジドにある山地名。

18) qibāb (単数 qubba) は“皮製のテント”で高価な品、詩人は部族の富を誇っている。戦闘に出る馬は自由に放牧せず、いつでも出撃できるようにつないで置かれた。しばしば、ラクダのミルクを飲ませた。

19) 部族の純血は詩人がよく誇るテーマであった。

20) 薪を集めるのは通常女奴隷であった。部族の威光が行き渡っているので弱者でも遠隔地に出かけ、無事に薪を集められると自慢している。

21) tā'ir “鳥”は9行と照らし合わせると“ワシ”のことと思われる。ここでは追いつけなかった相手の馬を褒めることによって追いつけなかったことの言い訳をしているが、相手が馬であれば追いつけたが、実は相手はワシであった。相手の馬を褒めているようで、自分の馬を褒めて

- 9- 彼の馬は土砂降りの日に雨水が羽を濡らしたしなやかな翼を持つ黒ワシのようであった²²⁾。
- 10- 部族の中で復讐を求める者および危害を加えようとするものはことごとくアブー・アスマーウ²³⁾に代償を恵んでもらえ。
- 11- あなたは牙が生えた(成熟した)出産間近のラクダも、妊娠10ヶ月のラクダも、いとわず与え、乳を大量に出し、他のラクダの仔に乳を飲ませるラクダも惜しまなかった。
- 12- 彼²⁴⁾は馬をラクダに結びつけて真昼間の炎天下をものともせず、味方の兵らを追いつ越して、(戦場に)急行する。
- 13- アルクラーキル²⁵⁾の血をひく馬たちは、夕方アルマラウラーの東方で敵に追いついた。
- 14- 逃げる事が出来たのは、目がくぼんだ²⁶⁾雌馬(に乗った敵)だけだった。それらは競争相手のラクダに打ち勝った雄ラクダのように長い首の由緒ある血統の馬だと言われている。
- 15- クルズル²⁷⁾に乗る騎士の倅アーミルよ、まことに貴様はみだらで悪態をつき、悪事を重ねる野郎だ。
- 16- 馬はサーフーク²⁸⁾で、多くの鉢のミルクを地面に流した。また、その他の分捕り品をもたらしたが、それは、皮袋いっぱいミルクや、すでにすっぱくなったミルクだった。

いる。殺した者が殺された者を褒めることにより自分を褒めるジャーヒーリーアの騎士道と軌を一とつにした表現である。

22) 鳥や野獣は雨が降る日は巣に向かって全速力で帰る。敵の馬の速さを之に譬えたもの。

23) 10行、'Abū 'Asmā'については、ズブヤーン族の族長 al-Hārith b. 'Awf と見なす説と、敵将アーミル・ブヌ・アットファイルをさすとする説があるが、カイロ版に従い、敵将とみなす。'Asmā'はアッラカムの日アーミルが避難した家の婦人 Bint Qudāma al-Fazāriya のことで、詩人は敵ながらすばやく逃げ切った彼にこのようクンヤをつけて敬意を表したものと考えられる。それ以下、敵将の寛大さをほめている。

24) ここでアブー・アスマーウは三人称に変わる。古詩ではよく見かける手法である。本文の ghāwalna-hum の主語は「ラクダ」、hum は「味方の兵」をさす。なお、戦場に近づくまではラクダで進み、戦場で馬に乗り換えるのが常であった。

25) アルクラーキル al-Qurāqir は有名な種馬、banāt は必ずしも雌を意味しない。人間以外の動物の仔には banāt がしばしば用いられる。アルマラウラー al-Marawrah は地名。

26) 目がくぼんだとは長時間追撃されて疲れ切ったさまを表す。

27) クルズル Qurzul は敵将アーミルの父の馬の名。

28) サーフーク Sāhūq はズブヤーン族がアーミル族を破った戦場地。「ミルクを地面に流した」とは、鉢の持ち主が殺され、鉢がひっくり返されたことをさす。「皮袋いっぱいのミルク」とは、捕まえた指導者たち、「すっぱいミルク」とは彼らの家来、をそれぞれさす。なお、16行は15行と入れ替わったものと考えられている。

— (VI) サラマ・ブヌ・アルフルシュブ・アルアンマーリー —

まえがき略 (Vのまえがきを参照)

(VI) テキスト

- | | |
|---|--|
| ۱- تَأْوِيَهُ حَيَالٌ مِنْ سُلَيْمَى | كَمَا يَعْتَادُ ذَا الدِّينِ الْغَرِيمُ |
| ۲- فَإِنْ تُقْبِلْ بِمَا عَلِمْتَ فَإِنِّي | بِحَمْدِ اللَّهِ وَصَالٍ صَرُومُ |
| ۳- وَمُخْتَصِصٍ تَبِيضُ الرُّبْدُ فِيهِ | تُحُومِي نَبْتُهُ فَهُوَ الْعَمِيمُ |
| ۴- غَدَوْتُ بِهِ تُدَافِعُنِي سَبُوحٌ | فَرَّاشُ نُسُورِهَا عَجَمٌ جَرِيمُ |
| ۵- مِنَ الْمُتَلَفِّتَاتِ بِجَانِبَيْهَا | إِذَا مَا بَلَّ مَحْزَمَهَا الْحَمِيمُ |
| ۶- إِذَا كَانَ الْحَزَامُ لِقُصْرَيْنِهَا | أَمَامًا حَيْثُ يَمْتَسِكُ الْبَرِيمُ |
| ۷- يُدَافِعُ حَدَّ طُبَيْيْنِهَا وَحِينًا | يُعَادِلُهُ الْجِرَاءُ فَيَسْتَقِيمُ |
| ۸- كُتِمَتْ غَيْرُ مُخْلِفَةٍ وَلَكِنْ | كَلَوْنِ الصَّرْفِ عُلٌّ بِهِ الْأَدِيمُ |
| ۹- تَعَادَى مِنْ قَوَائِمِهَا ثَلَاثُ | بِتَحْجِيلٍ وَقَائِمَةٍ بِهِمُ |
| ۱۰- كَانَ مَسِيحَتِي وَرَقِي عَلَيْهَا | نَمَتْ قُرْطَيْهِمَا أُذُنٌ خَذِيمُ |
| ۱۱- تُعَوِّذُ بِالرَّقَى مِنْ غَيْرِ خَبَلٍ | وَتُعَقِّدُ فِي فَلَائِدِهَا التَّمِيمُ |
| ۱۲- وَتُمْكِنُنَا إِذَا نَحْنُ اقْتَنَصْنَا | مِنَ الشَّحَاجِ أَسْعَلَهُ الْجَمِيمُ |
| ۱۳- هَوِيَّ عُقَابٍ عَرْدَةً أَشَارَتْهَا | بِذِي الضُّمَرَانِ عِكْرِشَةً دَرُومُ |

(VI) 訳

- 1- スライマーの幻影が彼を夜しばしば訪れる。まるで貸し手が借り手をひつこく訪れるようだ²⁹⁾。
- 2- もしも彼女が心得ている私への愛情を抱いて訪れるのであれば—神を讃えん—私は愛には愛で応えるであろう。だが愛がさめているならさっさと絆を切るであろう。
- 3- 水のなかに分け入るような草原が幾多あったことか。そこでは灰色のダチョウが玉子

29) 1行、短いナシーブで、スライマーの幻の相手が3人称となっている。2人称になる場合もある。

- を生み高く伸びた牧草地には人々の立ち入りは禁じられている³⁰⁾。
- 4- 私は早朝、この恐ろしい草原に俊足の馬³¹⁾に乗って侵入した。この馬の馬蹄の中央軟骨は熟したナツメヤシの実の核ほどに硬かった³²⁾。
 - 5- 左右を見つめる雌馬のなかの一頭は(全速力で駆けてきたため)汗が腹帯のあたりを濡らしていた。
 - 6- 腹帯は早駆けしたため、馬の短い肋骨の前までずれていたが、ちょうど婦人が帯を締める腰のあたりにあたる。
 - 7- 腹帯は馬の両乳房の先端に当たったり、駆けている内に正常な位置にもどって真っ直ぐになったりしている。
 - 8- それは栗毛の馬であって、色合いに疑いはない。まるで皮をシルフで二度染めした色のようなものである³³⁾。
 - 9- 馬の3本の足首には白い毛環があり、一本の脚だけがこれを欠き、一色の毛で覆われている。
 - 10- まるで3本の脚のう上に光沢のある純銀の帯輪がはめられているようだ。柔らかな耳それを耳飾にして吊るせばよいほどの見事な色合いである。
 - 11- 馬には妬みの目による病害が及ばないように魔よけの呪文がかけられ、首輪には護符が結ばれている。
 - 12- われわれが狩りに出かけるときには、繁茂した草原がこの馬に活力を与え³⁴⁾、いなくロバを捕えさせてくれる。
 - 13- アルダの地のワシが襲い掛かるようにこの馬は突き進むのであるが、ズー・アッドムラーン(またはズー・アッダムラーン)の地で足跡をのこさずに小走りする雌兎にはおびえてしまう。

30) 3行、敵対部族間を隔てる緩衝地帯の草原では放牧や狩猟は禁じられていた。このような草原は雨が降れば草が生い茂り野生の動物が増える。詩人は *ḥimā* (立ち入り禁止地区) に危険をおかして奥深く侵入したことを自慢している。

31) *sabūh, sābiḥ* “泳ぎ手” は駿足の馬の通り名として良く用いられる。

32) *nasr* (pl. *nusūr*) “ひづめの中央軟骨” の硬さもよく取り上げられる。角質の軟甲をナツメヤシの実の核に比するの常套手法。

33) 8行は *al-Mufaḍḍaliyāt* (III) の5行と、9行は同4行と同じもの。もともと、二人の詩人のどちらの作かは不明。

34) *ʿasʿala-hu* “活力を与えた” と訳したが、*ghūl* (食人鬼) の女性 *سَيْلَاة* *siʿlāh* にした、というのが原義。馬はしばしば *siʿlāh* にたとえられる。

— (VII) アルジュマイフ —

まえがき

この詩人は、すでに al-Mufaḍḍaliyāt (IV)で取り上げた。解説者アルアンバーリーによれば、本詩の5行目に Khālid b. Naḍla の名があるが、彼はアサド族の出身で ʿĀmir b. Ṣaʿṣaʿ 一族の Banū Jaʿfar に隣人庇護 (jiwār) の習わしに従い保護されていたが、Banū Jaʿfar は庇護の義務を果たさずに彼を殺してしまった。このために詩人はこの詩で Banū Jaʿfar を攻撃した。『歌の書』によると、Khālid b. Naḍla は al-Ḥīra の al-Mundhir b. Māʾ al-Samāʾ王の酒友であった。ʿAsad 族と Banū Jaʿfar b. ʿĀmir は Dhū ʿAlaq で戦い後者が敗れた。Muʿallaqa 詩人の Labīd の父 Rabīʿa b. Mālik (本詩5行) もこの戦いで殺された。

Jaʿfar の兵士らは敗走し ʿAsad の兵らはこれを深追いした。ʿAsad を率いたのは Khālid b. Naḍla や彼の息子 Ḥabīb および al-Ḥārith b. Khālid b. al-Muḍallal であった。彼らは長駆敵を追っている間に Banū Jaʿfar の別働隊に、気づかぬ間に取り囲まれていた。包囲軍は槍の名手というあだ名を持つ ʿĀmir ʿAbū Barā に率いられていた。この指揮官は Khālid に負傷兵を運んだり戦死者を埋葬するために休戦しようと持ちかけ、Khālid はこれを受け入れた。やがて、ʿĀmir が“(私の兄弟) Rabīʿa の消息を知らないか”と尋ねると、Khālid は“知っているとも、殺されたまま捨て置いた”と答えた。“誰が殺したのか”と尋ねると、“俺が一撃を与え、Ṣāmit b. al-ʿAfqam がとどめを刺した。”との返事。これを聞いて ʿĀmir は激怒して味方に Khālid 軍攻撃を命じた。この言い伝えによるならば、1行目の保護の約束とは休戦協定のこととなる。7行目の al-Ḥārith は ʿAsad 軍の3人目の指揮者と思われる。なお、10－14行は翻訳するのに不適。

(VII) テキスト

- | | |
|---|---|
| 1- سَائِلٌ مَعَدًّا مَنِ الْفَوَارِسِ لَا | أَوْفُوا بِحَيْرَانِهِمْ وَلَا غِيْمُوا |
| 2- يَغْدُو بِهِمْ قُرْزُلٌ وَيَسْتَمِعُ الـ | نَّاسُ إِلَيْهِمْ وَتَخْفُقُ اللَّمَمُ |
| 3- رَكْضًا وَقَدْ غَادَرُوا رَبِيعَةً فِي الـ | أَثَارٍ لَمَّا تَقَارَبَ النَّسَمُ |
| 4- فِي كَفِّهِ لَدَنَةٌ مُثَقَّفَةٌ | فِيهَا سِنَانٌ مُحَرَّبٌ لَحِمُ |
| 5- لَوْ خَافَكُمْ خَالِدُ بْنُ نَضْلَةَ نـ | جَتَّهُ سُبُوحٌ عِنَانُهَا خَذِمُ |
| 6- جَرْدَاءُ كَالصُّعْدَةِ الْمُقَامَةِ لَا | قُرُ زَوَى مَتْنَهَا وَلَا حَرِمُ |
| 7- وَالْحَارِثُ الْمُسْمِعُ الدُّعَاءَ وَفِي | أَصْحَابِهِ مَلَجًا وَمُعْتَصَمُ |

- ۸- يَغْدُو بِهِ قَارِحٌ أَجَشُّ يَسُو دُ الْخَيْلِ نَهْدٌ مُشَاشُهُ زَهُمُ
 ۹- مُدْرِعًا رَيْطَةً مُضَاعَفَةً كَالنَّهْيِ وَفِي سَرَارَةِ الرَّهْمِ
 ۱۰- فِدَى لِسْلَمِي تَوْبَايَ إِذْ دَنَسَ الْ قَوْمُ وَإِذْ يَدْسِمُونَ مَا دَسَمُوا
 ۱۱- أَنْتُمْ بَنُو الْمَرْأَةِ الَّتِي زَعَمَ الْ نَاسُ عَلَيْهَا فِي الْغَيِّ مَا زَعَمُوا
 ۱۲- يَمْرُجُ جَارُ أَسْتِهَا إِذَا وَلَدَتْ يَهْدِرُ مِنْ كُلِّ جَانِبٍ خُصْمُ
 ۱۳- وَأُمُّهَا خَيْرُهُ النَّسَاءِ عَلَى مَا خَانَ مِنْهَا الدَّحَاقُ وَالْأَثَمُ
 ۱۴- تَشْمِدُ بِالْدِرْعِ وَالْخِمَارِ فَلَا تَخْرُجُ مِنْ جَوْفِ بَطْنِهَا الرَّحِمُ

(VII) 訳

- 1- マアッド³⁵⁾に保護を保証した者達に約定を守らず、戦利品を取らなかった騎士は誰かと尋ねよ。
- 2- (敵将の馬) クルズル³⁶⁾は彼らを伴って敗走し味方の者達は髪房を風にはためかせながら逃げ行く足音を聞いていた。
- 3- 彼らは全速力で逃げたが、互いの息吹がぶつかる接近戦の場で、ラビーア³⁷⁾の亡骸を殺害者のもとに捨て置いたままであった。
- 4- 彼の手にはしなやかで真っ直ぐな槍が握られていた。その槍の鋒先は怒りに燃え、敵の肉を求めている。
- 5- 万一、ハーリド・ブヌ・ナドラ お前たちに(裏をかかれるとの)不安を抱いていたなら、手綱が他を引き離す俊足の馬が、かれを運び去っていただろうに。
- 6- それは毛の短い馬で、首は真っ直ぐな槍のようである。寒さで背にしわを寄せることもなければ餌が惜しまれることもない³⁸⁾。
- 7- アルハリース³⁹⁾は大声で呼びかけ助けを求めた。彼の味方のなかには避難所と保護所があった。
- 8- 彼を乗せて立派に成育した馬が、部族の馬を先導して駆けたが、それは大型の駿馬で軟骨部分には脂身が良くついていた。

35) マアッド Ma'add は非ヤマン系の北アラブをさす。

36) クルズル Qurzul は本詩集 (V) の Salama の詩15行に登場する al-Tufayl b. Mālik の馬。逃げ足が早いことで知られていて、ここでその馬を借用したものらしい。アラブ遊牧民は必要があれば逃げるが、これを恥とは思っていない。なお、頭髮は長くのぼし紐で束ねて両側にたらしっていた。

37) Rabī'a b. Mālik b. Ja'far すなわち、詩人ラビーアの父。

38) 後半はこの馬が背中に毛布をかけたり、ラクダのミルクを与えられたりして、大切に飼育されたことを表している。

39) al-Hārith b. Khālīd b. al-Muḍallal をさす。

- 9- 馬の騎士は薄手で二重織りの楔帷子⁴⁰⁾を纏っていたが、それは雨が降り注いで満水になった谷間のほど良いくぼ地の池の水面が風によりきらきらと輝いているようだった。
- 10- (彼らの母)サルマーの身代りになってやりたいものだ。彼らは汚名を着せられているが、それは出産にあたり母の子宮が飛び出さないように穴に栓をする者たちだからである。
- 11- お前たちは人々が、道を誤った女だと、言い募っている女のせがれどもだ。
- 12- 彼女の尻の隣の穴は広く伸びきってしまりがなく、子を産めば穴の隅々からごぼごぼという音がきかれる。
- 13- 彼女の母は最良の女⁴¹⁾であるが、膣と直腸を開けたり閉めたりすることが思いどおりにならぬ。
- 14- 彼女は肌着と襟巻を穴につめこむ。そのようにすれば、腹の中の子宮がとびださない。

40) 楔帷子が上等であること、およびその輝きを風でさざ波が立った水面の輝きに譬えるのは常套手段。

41) 「最良の女」に خَيْرَة *khayra* という女性形が使われている。

— (VIII) アルハーディラ (クトゥバ) —

まえがき

قُطْبَةُ بْنُ مَخْصَنَ بْنِ جَزُولِ بْنِ حَبِيبِ بْنِ عَبْدِ الْعُزَّى بْنِ خُزَيْمَةَ بْنِ رِزَامِ بْنِ مَارِ بْنِ
ثَعْلَبَةَ بْنِ سَعْدِ بْنِ ذُبْيَانَ بْنِ بَغِيضِ بْنِ رَيْثِ بْنِ غَطَفَانَ
قُطْبَةُ بْنُ قَيْسِ بْنِ الْأَعْظَمِ
قُطْبَةُ بْنُ أَوْسِ الْغَطَفَانِيِّ [اللَّسَّانِ]
الْحَادِرَةُ الْحُوَيْدِرَةُ

この詩人は、Ghatafān 系の Dhubyān 族の Tha'labā b. Sa'd 家の一員であった。
al-Hādira とは“大きな男”という意味である。彼の仲間 Zabbān が、狩りに出たとき、喧嘩をして、詩人の肩が大きく盛り上がっているのを、蛙に比して付けたあだ名と言われている。この詩人は6世紀後半にあった Huraqa の戦いに参加しているので、ジャーヒリーアの詩人とも言える。この戦いは Dāḥis の戦いのあと Dhubyān 系の部族間で起こったもので、Murra 族の al-Husayn b. al-Humām が指揮者として知られている。al-Mufaḍḍaliyāt にはこの戦いに関係する詩が8編取り上げられており、al-Hādira というあだ名をつけた Zabbān の詩も2編含まれている。なお、預言者の詩人と言われた Hassān b. Thābit はこの詩人を高く評価していたとのことである。

この詩は31行からなるが、最終行は関係の無いものが追加されたと考えられる。詩の内容はありきたりの手法による単純なものである。即ち、スマイヤ Sumayya という恋人への序詩にはじまり、自部族や詩人自身の自慢、飢えた放浪者への給食、仲間との旅、自身の旅などが語られている。

(VIII) テキスト

- ١- بَكَرْتُ سُمِيَّةَ بُكْرَةَ فَتَمَتَّعَ وَعَدْتُ عُذُوَ مُفَارِقِي لَمْ يَرْبِعْ
- ٢- وَتَزَوَّدْتُ عَيْنِي غَدَاةَ لَقِيْتُهَا بَلَوَى الْبُنَيْنَةَ نَظْرَةً لَمْ تُقْلِعْ
- ٣- وَتَصَدَّقْتُ حَتَّى اسْتَبَنَكَ بِوَاضِحٍ صَلَّتْ كَمُنْتَصِبِ الْعَزَالِ الْأَتْلَعِ
- ٤- وَبِمُقْلَتِي حَوْرَاءَ تَحْسِبُ طَرْفَهَا وَسَنَانَ حُرَّةٍ مُسْتَهْلٍ الْأَذْمُعِ
- ٥- إِذَا تُنَارِعُكَ الْحَدِيثَ رَأَيْتَهَا حَسَنًا تَبَسُّمُهَا لَذِيذَ الْمَكْرَعِ
- ٦- بِغَرِيضٍ سَارِيَةٍ أَدْرَتْهُ الصَّبَا مِنْ مَاءِ أَسْجَرَ طَيِّبِ الْمُسْتَنْقَعِ

- ٧- ظَلَمَ الْبَطَاحَ لَهُ انْهَالُ حَرِيصَةٍ
 ٨- لَعِبَ الشُّيُولُ بِهِ فَأَصْبَحَ مَأْوُهُ
 ٩- أَسْمِيَّ وَيَحْكُ هَلْ سَمِعْتَ بِغَدْرَةٍ
 ١٠- إِنَّا نَعِفُّ فَلَا تُرِيبُ حَلِيفَنَا
 ١١- وَنَقِي بِأَمْنٍ مَالَنَا أَحْسَابَنَا
 ١٢- وَنَحْضُ غَمْرَةَ كُلِّ يَوْمٍ كَرِيهَةٍ
 ١٣- نُقِيمُ فِي دَارِ الْحِفَاطِ بُيُوتَنَا
 ١٤- وَمَحَلِّ مَجْدٍ لَا يُسْرَحُ أَهْلُهُ
 ١٥- بِسَبِيلِ ثَغْرِ لَا يُسْرَحُ أَهْلُهُ
 ١٦- فَسْمِيَّ مَا يُدْرِيكَ أَنَّ رَبَّ فَتِيَةٍ
 ١٧- مُحَمَّرَةٍ عَقِبَ الصُّبُوحِ عُيُونُهُمْ
 ١٨- بَكَرُوا عَلَيَّ بِسُحْرَةٍ فَصَبَحْتُهُمْ
 ١٩- مُتَبَطِّحِينَ عَلَى الْكَئِيفِ كَانَتْهُمْ
 ٢٠- وَمُعَرِّضٍ تَغْلِي الْمَرَاجِلُ تَحْتَهُ
 ٢١- وَلَدَيَّ أَشَعْتُ بِأَسِطٍ لِيَمِينِهِ
 ٢٢- وَمُسْهَدِينَ مِنَ الْكَلَالِ بَعَثْتُهُمْ
 ٢٣- أَوْدَى السِّفَارُ بِرِمْمِهَا فَتَخَالَهَا
 ٢٤- تَخِذُ الْفَيَافِي بِالرَّحَالِ وَكُلُّهَا
 ٢٥- وَمَطِيطَةٍ حَمَلْتُ رَحْلَ مَطِيطَةٍ
 ٢٦- وَمُنَاحٍ غَيْرِ تَثِيَّةٍ عَرَسْتُهُ
 ٢٧- عَرَسْتُهُ وَوَسَادُ رَأْسِي سَاعِدٌ
 ٢٨- وَرَفَعْتُ عَنْهُ وَهُوَ أَحْمَرُ فَاتِرٌ
 ٢٩- فَتَرَى بِحَيْثُ تَوَكَّأَتْ ثِفْنَاتُهَا
- فَصَفَا النُّطَافُ لَهُ بُعِيدَ الْمُقْلَعِ
 غَلَلًا تَقَطَّعَ فِي أَصُولِ الْخِرْوَعِ
 رُفِعَ اللَّوَاءُ لَنَا بِهَا فِي مَجْمَعِ
 وَنَكُفُّ شُحِّ نَفُوسِنَا فِي الْمَطْمَعِ
 وَنُجْرُ فِي الْهَيْجَا الرَّمَاحِ وَنَدَّعِي
 تُرْدِي النُّفُوسَ وَغَنَمُهَا لِلْأَشْجَعِ
 زَمْنَا وَيَظْعَنُ غَيْرُنَا لِلْأَمْرَعِ
 يَوْمَ الْإِقَامَةِ وَالْحُلُولِ لِمَرْتَعِ
 سَقِمٍ يُشَارُ لِقَاؤُهُ بِالإِصْبَعِ
 بَاكَرْتُ لَدَّتْهُمْ بِأَدَكْنِ مُنْعَرِ
 بِمَرَى هُنَاكَ مِنَ الْحَيَاةِ وَمَسْمَعِ
 مِنْ عَاتِقٍ كَدَمِ الْغَزَالِ مُشْعَشَعِ
 يَبْكُونَ حَوْلَ جِنَازَةٍ لَمْ تُرْفَعِ
 عَجَلْتُ طَبَخْتَهُ لِرَهْطِ جُوعِ
 قَسَمًا لَقَدْ أَنْضَجْتَ لَمْ يَتَوَرَّعِ
 بَعْدَ الْكَلَالِ إِلَى سَوَاهِمِ ظُلْعِ
 هَيْمًا مُقْطَعَةً حِبَالُ الْأَذْرُعِ
 يَغْدُو بِمُنْخَرِقِ الْقَمِيصِ سَمِيدَعِ
 خَرَجَ ثَنَمٌ مِنَ الْعِثَارِ بِدَعْدَعِ
 قَمِينَ مِنَ الْحَدَثَانِ نَابِي الْمَضْجَعِ
 خَاطِي الْبَضِيعِ غُرُوقُهُ لَمْ تَدْسَعِ
 قَدْ بَانَ مِنِّي غَيْرَ أَنَّ لَمْ يُفْطَعِ
 أَثَرًا كَمُفْتَحِ الْقَطَا لِلْمَهْجَعِ

۳۰- وَتَقِي إِذَا مَسَّتْ مَنَاسِمُهَا الْحَصَى وَجَعًا وَإِنْ تُزَجَّرُ بِهِ تَتَرَفَّعُ
۳۱- وَمَتَاعِ ذُعْلَبَةٍ تَخْبُ بِرَاكِبٍ مَاضٍ بِشِيعَتِهِ وَغَيْرِ مُشِيعٍ

(VIII) 訳

- 1- スマイヤは朝早く目覚めた。よって彼女に語りかけよ。彼女は待つことなく別れていく旅人のように夜明けには出立してしまうのだから。
- 2- アルプナイナの砂丘の麓で彼女に会った朝、私の目は生気をみなぎらせて、彼女をずっと眺めていた。
- 3- 彼女が顔をそむけると、彼女の純白で輝く首がお前を虜にした。それは首の長いガゼルが頭をあげたときの首さながらであった。
- 4- 涙腺に浮かぶ美女の瞳は真っ黒で、そこにお前は眠気が漂っていると思うであろう⁴²⁾。
- 5- 彼女がお前に話しかける時には、そのほほ笑みは愛らしく、唇は口ずけするのに甘味だ。
- 6- (お前が吸う彼女の唾液は) まるで夜の雲が降らせた新鮮な雨水のようである。東風がもたらす雨は濁っていても池にたまと清水になる。
- 7- (夜の雨雲による) 洗い流すような豪雨⁴³⁾は広い川床に氾濫したが、雨が止むと水は清んでしまった。
- 8- 激流は雨水をもてあそび朝になると草木の間に広がり、枝分かれしてヒマの樹の根を洗った。
- 9- スマイヤよ、そなたはなんて不幸なことよ。そなたは我々が裏切り行為のかどで集会でその印となる旗⁴⁴⁾を揚げられたと聞いたのか。
- 10- 我々は義務を果たす者であり、同盟者に疑念を起こさせるような者ではない。われ等は(他の者が欲に身を委ねても)食欲を自らには禁ずる者である。
- 11- われらは最善の財産でもってわれらの名誉を保つ。戦闘に際して、槍を敵に刺したままにして置くのはわれらの名と家系を大声で知らせるためだ⁴⁵⁾。
- 12- 人々の命を奪う日ごとの戦争の淵にわれらは突入し、そこで戦利品を手に入れるのはまことの勇者である。
- 13- われらは名誉をまもるべき場所にテントを張り(耐え難きを耐え)しばらく住んだが⁴⁶⁾、他の者は牧草の豊かな土地へ移って行った。
- 14- 多くの名誉ある土地において、(テントを張って)住み着く日には、人々は家畜をは

42) 女性の目に眠気が漂っているのは魅力があるものとして描かれている。

43) 雨に触れるとすぐ豪雨へと話を拡大している。

44) ジャーヒリーア時代には、裏切った者はウカーズの市で、彼のテントに目印の旗が掲げられた。

45) 「これなる敵は某家の某が槍で刺した」と叫ぶことを指す。

46) アムル・ブヌ・クルスウムの al-Mu'allafa 59行の「われらは(味方を支援するため)ズー・ウラータの地にラクダをとどめ、ミルクがよく出る雌ラクダには枯れ草を食べさせて耐えた。」と同主旨。

るかに離れた肥沃な土地に放牧することはない。

- 15- 恐ろしい敵との境界への道には、人々は家畜を放牧させない。その方角は指で示される。
- 16- スマイヤよ、私がどれだけ多くの若者たちに満ち溢れる黒い皮袋のブドウ酒を振舞って喜ばせたか、知らないだろう。
- 17- 朝酒を飲んだ挙句、若者らは、人生でのぞむところが見聞できる場所で目を充血させている。
- 18- 彼らが朝早く私のところにやってきたので、ガゼルの血のような真っ赤なブドウ酒の水割りを振舞ってやった。
- 19- 彼らは酒の置き場にうつむいて集まっていたがその様子はまるでまだ埋葬されていない亡骸の周りで泣いているようであった⁴⁷⁾。
- 20- 私はしばしば生煮えの肉を大鍋に入れて炊きなおした。空腹の人々のために料理を急いだのである。
- 21- 客のなかに髪が乱れ腹を空かした男がいて、右手を伸ばして誓い「よく煮てくれ」と言ったが、実は煮上がるのが待てなかったのである。
- 22- 私は、しばしば旅に疲れ、寝る時間がなかった者たちを、相次ぐ旅で四肢の苦痛のためびっこをひく痩せた雌ラクダに乗せて送ったのを思い出す。
- 23- 旅がラクダの肉をそぎ落とすと、あなたはラクダが脱水症にかかり、前足の静脈が切られ瀉血の治療を受けたと思うであろう⁴⁸⁾。
- 24- ラクダは砂漠を鞍を乗せて大股で歩むが、それぞれはぼろのシャツを纏った美男の勇者らを乗せて進む。
- 25- 私はしばしば、やせ衰えよろけつつ、ダアダ⁴⁹⁾と声を掛けられて姿勢を立て直すラクダの荷を他のラクダに積み替えてやったものだ。
- 26- 私はしばしば、泊るのにふさわしくない宿場で夜、休息したものだ。そこは災難にあいやすい恐ろしいところで休息するには適さなかったのだが。
- 27- そのような場所で腕を枕にして夜半から休んだ。私の腕の筋肉は引き締まり、老人のように静脈が浮き上がってはいなかった。
- 28- 枕にした私の腕から頭をあげると、腕は赤くなり力を失っていた。腕が体から切り離されているかと思うほどであったが、切り離されてはいなかった。
- 29- あなたはラクダが砂地にうずくまって眠ったところに、ラクダの膝や胸のこぶで出来たくぼみを見るであろう。それは、砂ライチョウが産卵するくぼみを思わせる。
- 30- ラクダは足裏で小石を踏むと苦痛のため身を固くするが、叱られると速度を上げて走る⁵⁰⁾。
- 31- なんと多くの荷を乗せた駿足の雌ラクダが旅する集団または個人を乗せて調子よく

47) この行は前後の行との関係があいまいである。カイロ版では 18、19 行が入れ替っている。

48) ラクダの脱水症に瀉血をしていたことを示す。

49) ジャーヒリーア時代にはラクダがつまずくと da'da' と声をかけて姿勢をたてなおさせた。イスラーム時代になるとこれを嫌い、*ʾallāhumma ʾirfaʾ wa-nfaʾ* と言うようになった。

50) 30 行は 25 行の後にあったものかもしれない。カイロ版では、30 行を 25 行の後に配置している。

歩いていくことか⁵¹⁾。

資料

Lyall, C. J. (ed), *The Mufaḍḍaliyāt, An Anthology of Ancient Arabian Odes. According to the Recension and with the Commentary of Abū Muḥammad al-Qāsim ibn Muḥammad al-Anbārī*. [Arabic Text] Oxford, 1921.

Shākir, A. M. and A. M. Hārūn (eds), *al-Mufaḍḍaliyāt*. 8th edn., Cairo, Dār al-Maʿārif, n.d.

51) この一行は他の詩のものが紛れ込んだものか。